

【優秀賞】

名のない旅

中田 結菜（埼玉県 埼玉県立浦和第一女子高等学校 2年生）

あの日も雪が降っていた。僕から大切なものを、大切な人を奪い去っていく雪が。

「ねえ、やだ：死んじゃやだよー！」

僕の声が白い世界に響く。

「お前が：無事でよかった！」

そう言って、お父さんが僕の手に触れる。

「何言ってるの？お父さん」

「私たちの子どもがあなたで、本当に良かった：これからも：強く生きて：」

僕の頬に触れたお母さんの手から力が抜けていく。何かつぶやいたように思えたが、力のない口から声が聞こえることはない。

「なんて言ったの？聞こえないよ……！」

二人は何も答えず、ピクリとも動かない。

「嘘：嘘だよね：？ねえ！何か答えてよ！お父さん！お母さん！」

無情にも雪は二人の体温を奪っていき、いつしか僕の体にも積もっていった。

「僕を、一人にしないで……」

燦々と輝く太陽は、平坦な道を無言で歩き続ける僕の体にも照り付ける。重たい荷物も相まって汗が止まらない。もう歩き始めてからどれくらいになるだろうか。そう考えてみるも、すぐに答えを出すことを諦める。

僕が歩いている一本道の両端には、元は生命力にあふれ、道行く人々の目を楽しませていたであろう花や草木が、枯れ果てた無残な姿で残っている。

（この花たちは動けないから……）

僕たちが生きるこの国では雪が触れたものの命を奪う。そこに例外はない。しかし、一度土に触れた雪は効力を失う。そして命を奪う雪がいつ、どこで降り出すのかは誰にもわからない。生まれた時からこんな世界なので、疑問を持ったことはないが……

（雪さえなければお父さんとお母さんは……）

どうしてもそう思ってしまう。だが、そんなことを考えても意味がないと思い直し、頭を軽く振って考えることをやめる。そのまましばらくの間歩き続けていると、道の先に人影が見えた。

（あれは……女の子？僕と同じ年くらいか）

見えてきたのは、道の端にしゃがみこんで枯れた花を眺めている少女だった。

（何をやっているんだ？）

不思議に思い見ていると、少女は目を閉じそっと手を合わせ始めた。雪によって生命を奪われた花なんて珍しくもないだろうに……そう思いながらも、なぜかその少女から目が離せない。風になびく髪は腰に届くほどで、珍しいくらいの漆黒だった。

どのくらい時間が過ぎただろうか……一分かもしれないし、十分かもしれない。

少女が目を開いたことで、見つめ続けていたことに気づく。時が流れていることに驚きつつも、少女の立ち上がる動作につられて空を見上げ、顔が青ざめるのを感じる。空が曇ってきていた。今にも雪が降りそうだと。

とっさに少女に近づく腕をつかみ、

「空が曇ってきてる！早くどこか雪に触れない場所に入らないと危ない、急いで！！」

そう告げ、どこか逃げ込める場所がないか辺りを見渡すも、周りには枯れた花や木があるだけで建物は見当たらない。どうしよう、早くしないと彼女が危ない；そう考えた時、

「大丈夫。雪は降らないわ。」

「え？」

「私には、いつ雪が降るのがわかるの。今日は降らない、降るのは明日。だから大丈夫よ。」

一瞬何を言われているのか理解ができなくなる。今日は降らない？いつ降るのがわかる？そんなことはありえない、雪がいつ降るのかは誰にもわからないはずだ。そう思うのに、心のどこかで少女の言葉を信じ始めている自分がいた。

「で、でも空が……」

そう言いながら空を見上げて愕然とする。さっきまでの分厚い雲が嘘のように雲は風に流され、雲間から太陽が見え始めていた。

「嘘だろ……」

「ね？だから大丈夫。心配してくれてありがとう。じゃあ、私はもう行くわ。」

そう言い残して立ち去ろうとする少女をとっさに引き留める。

「待って！本当に、いつ雪が降るのかわかるの？」

「ええ。でも、今まで誰も信じてくれなかった。だから、信じなくてもいいわ。」

そう言う少女の顔は悲しそうに見えた。

「なら、君は、どこへ行くこうとするの？」

「私は……街に。あそこなら全体が大きなドーム状になってるから、誰も、いつ雪が降るのかなんて気にしないもの。」

「僕も、街へ向かっているんだ。僕は君の言うことを信じるよ。だから……一緒に行こうよ。」

「なんで、そんなに簡単に信じられるの？」

「だって、今日の前で雲が晴れていっただろう。今にも雪が降りそうだったのに！」

「……まさか、それだけ？」

「？うん。」

少女は口を開いてぼかんとしたような表情をしていたが、その後少し笑って言った。

「ふふっ、あなたって面白いわね。」

少女の笑顔は花が綻ぶようで、僕はまた目が離せなくなった。

「いいわ、一緒に行つても。」

「え……本当に？」

「ええ。あなたとなら楽しそう。」

「やったあ！じゃあ、これからよろしくね。」

「よろしく。」

そう言って、僕と彼女は握手を交わした。

彼女と出会ったときはそんな感じだったなあ……と思い出していると、

「ね、そろそろ出発しない？……聞いてる？」

「うえ？あ、ごめん！ぼーっとしてた」

「そんなことだろうと思つたわ。」

彼女に出会ってから一か月ほどが経つた。僕らが出会つた場所から考えると、街までの距離は残り四分の一くらいにまで近づいてた。

「じゃあ、行こうか。」

少し歩いたころ、彼女が僕に話しかけてきた。

「そういえば、あなたは会つた時からずっとその荷物を背負つてゐるのね。」

彼女の言う通り僕はずっしりとしたリュックを背負つていた。

「重そうだし、私も手伝いましょうか？代わるわ。」

「いや、いいよ。これは僕が持つていないと意味がないんだ。」

「そう……なら、いいけれど……」

彼女を見ると、首を傾げ不思議そうにしていた。それもそうだろう、僕がこれまでの旅で今回のように自分の意見を主張したことはほとんどない。夜の間の見張りをしたいという彼女に、せめて交代制にしようと言つたことぐらいじゃないだろうか。

だから、彼女が不思議そうにするのも無理はない。でも、これを彼女に預けることはできない。これは僕が持つていないと意味がないし、自分で街まで持つて行かなければいけないものだ。だから、僕は話を変えようと試みる。

「ところで、君は街に行つたら何かしたいことはあるの？」

彼女はまだ不思議そうにしながらも話に乗ってくれた。

「そうね……私は街に行くことが目的だったから、全然考えてなかつたわ。あなたは？」

「僕は……」

ポケットの中身に思いを馳せる。

「僕は、雪のことを気にせずに生活できたらそれで満足かな。」

「確かに。それはそうね。」

本当のことを話せない罪悪感が残るが、今は話せない。別れる前には話そうと心の中で決意した。

「どうかしたの？早く行きましょう。」

彼女の声で、立ち止まっていたことに気づく。

「ああ、ごめん！行こう！」

~~~~~

街が目と鼻の先に迫つたその日は朝起きた時から空が暗く、嫌な感じの空だった。

今まで雪が降つたときは、朝起きた時に彼女が教えてくれた。だからこの時も彼女が何も言わないのなら降らないのだろうと、そう思っていた。きつと、いつ雪が降るかかわかるということに慣れすぎていたのだろう。以前ならばもっと気にしていた天候も、彼女と行動を共にするようになってからはまったく気にしなくなっていた。そして、雪の恐ろしさを、簡単に命を奪つていく恐怖を、忘れかけていた。

「準備はできた？」

「私はもう大丈夫よ。あなたが平気なら出発しましょう。」

そうして歩き始めてから三十分くらい経つた頃だろうか。

「もう少しで街に着きそうね。」

「多分順調にいけば明日か、明後日には着くんじゃないかな。」

「じゃあ、本当にもうすぐなのね。」

僕は、いつ彼女にあの事を話そうか悩んでいた。別れる前には話そうと思つていたが、タイミングを考えているうちに今日まで来てしまった。

(今日の夜、寝る前に話すか)

いざ話すと決めると憂鬱感があるが、いつかは話さなければならぬことだと考えつつ少しの間お互いに黙々と歩き続ける。

ふと気が付くと、辺りがさっきまでと比べて暗くなっていた。

「まずい、これは…雪が降る…!!!」

彼女がいたことで天候を気にすることがなくなつたとはいえ、それまでは自分の勘で生きてきたのだ。さすがに降る直前の空気感はわかる。ただ、彼女が何も言っていないことが気にかかると、それでも、今優先すべきなのは身の安全だ。

「こっち来て!」

腕を引いて走り出す。

「え、ちょ…どうしたのよ?!」

彼女が驚いているのがわかるが、今はそんな場合ではない。周りを見渡すと、少し先にちょうどよく小屋があるのが見える。

(とりあえずあそこへ行こう)

そのまま走り抜けて、小屋の中に入る。

「何なのよ、急に、走り出すなんて」

息が上がっている様子の彼女に向つて僕は問いかける。

「本当にわかつてないの?」

「…っ?どういふことよ。」

僕にもわけが分からない。今まで彼女の予報が外れたことは一度もなかった。だからこそ、今ここにいられるともいう。

「多分、もうすぐ雪が降るよ。」

「え…?それはないわ。だって私、何も感じてないもの。雪が降るときはわかるわ。」

「僕も、君の予報が外れたことはないって知ってるし、外れることはないって思ってる。だけど…」

彼女の目を気にしつつ続ける。

「雪が降る。僕も、君と出会うまでは一人で旅をしていたんだ。雪が降る直前の空気はわかる。」

僕がそう言い切つたその時、視界の端を何か白いものが横切つた。窓のほうを見ると、

「雪…。本当に降るなんて…」

ふと、彼女のほうを見てみると、

「うそ…嘘よ…だって、わたし、何も…」

彼女は自分の手を見つめながらしばらく何かをつぶやいていたが、少しするとはっとしたように顔を上げ、

「もしかして、私…」

そう言うと彼女は外へ飛び出していった。

「待って!」

外を見ると、もう雪は止んでいた。どうやら通り雨…通り雪だけらしい。それでも、一度予報が外れた以上は次にいつ降るかわからない。彼女がもし雪に降られたら…想像するだけで恐ろしい。

(行かなきや)

その思いだけで僕も外へ飛び出す。小屋に入ってからそんなに時間はたっていないはずだが、さっきよりもだいぶ暗くなつたように感じる。

(これじゃあ道に迷ったら帰れない)

小屋を出ると前は森になっていた。足元を見ると、雪のおかげで土がぬかるみ、彼女の足跡が残っていた。それは目の前の森へと続いている。

(こっちか…)

僕は森へと入っていった。名前を呼ぼうとして、彼女の名前を知らないことに気づく。どれくらい探したろうか。と、先に大

きな木があるのが見えた。よく見ると、木の根元で足を抱えて座っている女の子がいる。

(よかった…彼女だ)

近づこうとしてふと上を見上げると、木の枝に雪が積もっている。雪を乗せた枝は重みに耐えようとして大きくしなっている。すると、さらに上の枝から雪が落ちてきた。今までぎりぎりのところで耐えていた枝は、雪の重みに耐えきれなくなってしまったらしく、

(まづい！あの雪はまだ土に触れてない！)

枝が折れ、雪が落ちるのがスローモーションに見える。瞬間、僕は荷物を投げ捨てて走り出していた。間に合え！彼女のもとにたどり着いた瞬間、僕の体より小さい彼女の体を必死に抱え込む。

一拍置いて、体に雪が落ちてきた。思っていたより多い雪に息が詰まりそうになるが、この腕を緩めて彼女にほんの少しでも雪が触れたら彼女が死んでしまう。それだけはだめだ、という思いで雪をやり過ごす。

少しすると、落ちてくる雪が止んだ。彼女の体に雪がかからないように細心の注意を払いながら体を起こす。僕の下にいる彼女を見ると、死を間近に感じた恐怖から彼女の顔は青ざめ、体がたがたと震えていた。

「大丈夫？雪はかかってない？」

「ええ、私は平気よ…って、あなた、体に雪が！し、死んでしまふの…？いや、いやよ！もう少しで街に着くのよ。せつかくここまで来たのに、なんであなたが…！」

混乱してパニック状態になっている彼女の肩をつかみ、目を合わせて僕は言う。

「大丈夫。大丈夫だよ。ほら、見て。僕は生きてる。」

「あ…え…なんで…？なんであなた、生きてるの…？」

本気で混乱してきた様子の彼女にそれもそうだと思いつつ、こは危ないからと告げてとりあえず木の下に連れ出す。

「どうして?!雪に触れたら死んでしまうのではないの?!」

「ずっと言えなくてごめん。言い訳にしか聞こえないかもしれないけど、本当は今日の夜に全部話そうと思ってたんだ。…全部話すから聞いてくれる？」

「…わかった。あなたががそう言うなら、聞くわ。」

辺りは、すっかり暗くなっていた。さっきいた小屋までの道はもうわからないので、近くに見つけた洞窟の中で夜を過ごそうと決めて二人で並んで座る。

「僕が一人で街に向かうのは、僕の両親が死んじゃったからなんだ。…あの日も今日の朝みたいに空が暗くて、でも幼かった僕は気にせず外に遊びに行ってた。遊びに夢中だった僕は空なんて全然気にしてなかったんだ。気づいた時にはもうすぐにも雪が降ってきそうで、怖くなってその場でしゃがみこんで泣いていた。そしたら両親が汗だくで僕を見つけてくれたんだ。でも、手を引いてくれた時、雪が降ってきた。その時は降ってくる雪がすごくゆっくりに見えて、もう少しで僕の手が落ちそうになった。ああこれで終わりかって本気で思った。そしたら、お父さんとお母さんが僕を抱きしめて守ってくれた。それで僕の両親は死んだんだ。」

僕の話を聞く彼女の息をのむ音がやけに鮮明に聞こえた。

「でも…でもね？両親が死んじゃって、二人のそばで泣いていた僕にも雪が降ってきて、よかった、僕も二人と一緒に逝けるって思った。なのに、僕は生きてた。その時に気づいたんだ。僕は…」

僕は、雪に降られても死ねない体質らしい。」

「そんなことって……」

「僕もそう思ったよ、でも僕は生きてる。」

彼女ははっとしたように言った。

「じゃあ、もしかしてあのリュックって……」

僕もちらりと視線をリュックに投げる。

「うん、僕の両親の骨が入ってる。」

「だから頑なに自分で持とうとしたの……。なら、あなたが街を  
目指してる理由も？」

「両親の骨を埋葬して、あと……」

ポケットからあるものを取り出して、彼女に見せる。

「これは……」

「花の種だよ。これを二人のお墓に植えたいけど、そのためには  
雪が降らないところじゃなきゃダメなんだ。」

「屋根がないと枯れてしまうから……」

「ずっと黙っててごめん。」

彼女の顔を正面から見ることができず、覗き込むようにして  
見る。

「ずっと私の力のこと、誰も信じてくれなかったわ。でも、あな  
たは信じてくれた。私、すごく、すごくうれしかったの……。だか  
ら、私も信じる。あなたは私のことを体を張って守ってくれたん  
だもの。」

僕は、彼女がそんなことを言ってくれるとは思っていなかった  
ので、不意を突かれて

「あ……れ……? おかしいな……なんで、ぼく、涙なんか……」

涙はなかなか止まってくれず、僕につられたのか彼女まで泣き  
だしてしまい、泣きつかれた僕たちはそのまま寝てしまった。

次の日の朝、僕は彼女の声で目覚めた。

「ねえ、起きて!」

「ん……? ふあああ、おはよう……」

「そんなのいいのよ、早く、こっち来て!」

興奮しているような様子の彼女につられて外に出た僕はまぶ  
しさに目を細めつつ、目の前に現れたものを見る。

「これって……!」

「そうよ! 昨日着いてたみたいなの。」

目の前にあつたのは、街の入り口である巨大な門だった。寝す  
ぎてしまったらしく、もう太陽は高く昇っている。

「やっと、着いたんだね。」

「ええ……早く行きましょう!」

今すぐにも駆け出してしまいそうな彼女を引き止め、僕は言  
う。

「あの……君の名前を覚えてくれないかな」

「え? ああ、そうね、私たちお互いの名前も知らないのね。」

「僕も昨日気づいてびっくりしたよ。」

「あの、名前の前に一つ聞きたいのだけど……これからも、一緒  
いて……くれる? もう、いつ雪が降るのかはわからないけれど……」

僕はそんなことを聞かれるとは思わなかったので、少し固まっ  
てしまう。それから……

「もちろんだよ! それに、これからは雪の心配なんてしなくて  
いいんだ。これからもよろしくね。」

彼女の顔がぱあっと明るくなる。

「ええ! これからも、よろしく。」

そうして、あの時のように握手を交わす。

「じゃあ、自己紹介から始めようか。僕の名前は……」

僕たちのことを歓迎するかのよう  
に、足元を風が吹き抜けて  
いった。